

22 周防大島の文化財

明月上人 生誕の地（日前）

近世の名筆明月上人^{がんぎょうじ}は、享保12年（1727年）8月15日、日前の願行寺の二男として生まれた。生まれた日が月の美しい仲秋であったので、後に明月と名乗った。

明月は、幼児から本堂の縁に濡れ雑巾で字の稽古に励んだと言われる。さらに師匠について涙ぐましい努力の末、越後の良寛、備中の寂庵^{じやくあん}と共に近世の三筆と称されるようになった。

14歳で愛媛県松山市の円光寺に入り、33歳で七代目の住職となる。20歳のころ、京都、大阪、江戸に游学し、仏教や儒学の学を究め、^{そらい}祖徕の古学を好んだ。寺の住職を子に譲り、晩年は1日中書に熱中して暮らした。

頼まれれば額や石碑や寺の鐘の字や本のまえがきなど気安く引き受けた。町の人々は、「明月さん」と呼んで親しんだ。また散文づくりや書を通じて多くの友達がいた。



願行寺境内にある明月上人の銅像①と正岡子規が寄せた句の句碑②



「^{ふそうじゆでん}抹桑樹伝」や「伊予国道後温泉記」などの書から天下の明月の名を高めている。

「風呂吹きを喰ひに浮世へ百年目」は、明月上人の百回忌の法事の時、正岡子規が寄せた句である。

「一仏国界皆聞法」と書かれた明月上人自筆の軸物が願行寺に残されている。その字体をそのまま碑にしたものと、子規の句の碑などが願行寺の境内に建てられている。

《文化財保護審議会委員 正久 武則》

先日、友人からの誘いで周防大島の瀬戸内アルプスの縦走登山に挑戦してきました。

周防大島に来る前は関東にある高尾山や奥多摩の山で登山を楽しんだり、少々体力が必要な屋久島のトレッキングに行ったこともあるので登山初心者ではないと自覚しており、気軽に臨んだのですが、初めての縦走は想像以上のものでした。

当日は汗ばむ気候でしたが、山道は木陰が多く空気は少しひんやりとしており、清々しい山の空気を吸いながら気持ちよく文珠山の中腹からスタートしました。四境の役の土塁、三ツ石古戦場の砲台跡、ひっそりと佇む岩屋観音を通り、あけびの実を見つけたり、金木犀の香りで一杯の道を通ったり、マムシに連続して遭遇したりと歴史に自然、スリルも感じながらの登山です。

文珠山の次は嘉納山、源明山と続き、ゴールの嵩山まではかなりの長丁場です。後半には足がガクガクになり、みんな黙々と、ただただ重い足を前へ前へと進めていきました。そして日も暮れ始めたころに嵩山のゴール地点に到着したときは疲労よりもやりきったという思いでいっぱいでした。

その後二、三日は脚のあちらこちらが痛く、思い出だけでない余韻も残した縦走でしたが、あのしんどさと達成感と筋肉痛をまた味わいたくなり、また次の登山を計画中です。

さて、今回の海掃除は12月5日(火)午後3時から長浜の海岸にて行います。

地域おこし協力隊員 山崎千寿の
しましまタイムズ
SHIMASHIMA TIMES

22

周防大島町定住促進協議会
☎0820(74)1007



▲嘉納山山頂でランチをとりほっと一息。